内容

[『丘の上、ねむのき産婦人科』 1](#_Toc80697185)

[ゼロ場・開演前　ロビー　２０１９年 1](#_Toc80697186)

[１場　ハイライト　２０１９年 1](#_Toc80697187)

[３場　自由　２０１９年 2](#_Toc80697188)

[あとがき 3](#_Toc80697189)

# 『丘の上、ねむのき産婦人科』

作　谷賢一

日本のどこか、人口１０万人程度の地方都市。駅前には何もなく、メインの商店街や役場・郵便局などは歩いて５分ほど離れた場所にある。その商店街の中心からさらに２キロほど離れた丘の上にある『ねむのき産婦人科クリニック』のロビー……（サンプルなので以下略）。

## ゼロ場・開演前　ロビー　２０１９年

音楽が流れている。あの、病院特有の、ただ聞き流されるだけのオルゴール音楽。１０名の男女がロビーに座っている。一人一人の居方から、それぞれの個性や悩み、考え、関係性が読み取れる。サンプルなので以下略。

二人の男女が、診察室へと入っていく。

## １場　ハイライト　２０１９年

アキトのアパート。部屋の隅にアイが座り込み、アキトは南向きの窓から外を眺めている。

アイ　　何考えてるの。

アキト　いや。

アイ　　考えてた。

アキト　何でもないよ。

アイ　　聞かせて。

アキト　変な話だよ。

アイ　　いいから。

アキト　……いちばんはじめ、人生で最初の記憶。俺はなぜか近所の公園のジャングルジムの上、雨上がりの昼下がり、たぶん初めて登ったんだな、滑り台も鉄棒もも、普段手を伸ばして触るものがみんな下に見えた。丘の下、遠くまで見下ろせて、いい気分でさ、突然わかったんだ。俺は俺で、他のもの、滑り台とも鉄棒とも違う。母さんとも兄ちゃんとも違う。わかったんだ。そのとき、なぜか。

遠く踏切の音が聞こえる。アキトはいつもの癖で、いつの間にか手に持っていたハイライトのソフトパッケージに気がつく。それを握り潰し、部屋の隅に捨てる。アイはそれを見ているが、気にしていない様子。

アイ　　私覚えてんの、お母さんのお腹の中にいたときのこと。いるでしょたまにそういうこと言う子。私それ。あったかくて薄暗くて、でも真っ暗じゃない、ほんのり明るい、そんなわけないんだけど。さらにそんなわけないんだけど、「そろそろだよ、もう出る頃だよ」って、何故かわかって。そのとき感じたこと、はっきり覚えてる。何だと思う？

アキト　何？

アイ　　今感じてることと似てる。

アキト　何？

アイ　　あのときも今も、同じ感じ、私が感じてるのは、

轟音、電車が通り過ぎる。その間、二人の会話は中断される。１５秒ほどの間。

本当はこのあと１０分くらいあるが、サンプルなので割愛。

## ３場　自由　２０１９年

フラッシュが炊かれ、エリカが写真を取られている。ボサノヴァなんか流しているような店。

エリカ　――私の母は専業主婦でした、完璧な。学校から帰るとおやつは手作りのお菓子と紅茶、晩ごはんは４・５以上あるのが当然、みたいな。父は母のことを大切にしていましたが、対等な関係とは言えなかった。だからよく、自由って何だろうとは考えました。

　　　　――何が当然かというのは時代によって変わります。こうして大きなお腹で現場に立つのは正直大変ですし、トラブルや反発もあります。でもこれをきっかけに社会全体の意識が変われば、私の後輩や……それこそ子どもたちに、新しい自由が産まれる。

　　　　――昔から商いは三方良しと言う通り、何を与えられるか、どう貢献できるか考えることが、企業の価値を高めることにも繋がります。私はこのことを、母から学びました。自分の利益を考えず、与えることを考える。生き方は違っても、母は今も私の最も尊敬する人です。

カメラマン　じゃ最後、決めカットお願いします！

エリカはポーズを取る。大きなお腹を強調しつつ、笑顔を振りまく、意味のわからないポーズ。それは立場上、見せてやる必要のある愛想なのだと頭ではわかっているが、この愛想自体が自分をひどく侮辱しているような感じもして、憤りも感じる。サンプルなので略。

# あとがき

　本作の執筆にあたっては、筆者の家族・知人・友人などの他に、２０名を超える有志の方々にインタビューを行い、書籍・映像などの資料調査と併せて参考にさせて頂いた。サンプルなので以下略。

二〇二一年八月四日　谷賢一